

英語の感嘆文の形式と習得

On the Form and Acquisition of Exclamative Sentences in English

福田 稔

本稿は英語の感嘆文について、次の2つの可能性を提案する。まず、英語の感嘆文にはいくつかの形式があるが、その中でネイティブスピーカーが最も自然であると感じるのはhowやwhatを用いたWH感嘆文ではなく、否定疑問形式の感嘆文である。この事実をBrown and Levinson (1987) のフェイス (Face) に着目して、ポライトネス (politeness) という概念で説明する。また、CHILDESを使ったhow感嘆文の習得に関する研究調査から、子どもはかなり早い時期に「ある状態や様態が過度である、極限值にある」という意味概念を知っており、その表現法も知っていると考えられる。

キーワード：英語、感嘆文、言語習得、フェイス、ポライトネス、CHILDES

目次

- I はじめに
- II 英語の感嘆文
- III 言語直感調査
- IV 感嘆文の習得
- V おわりに

I はじめに

英語の感嘆文については意味、統語、語用といった多角的な側面からの研究がある。最近ではコーパスを用いた研究も発表されている (Collins (2005) や Takahashi and Takahashi (2003) を参照)。本稿は、最近あまり着目されていない、ネイティブスピーカーの言語直感調査と言語習得に関する事実に着目して、英語の感嘆文の特異性を説明するのが目標である。

本稿は次の構成から成る。次の第2節では、英語の感嘆文について概観する。そして、第3節では、三宅 (1985) の調査を紹介する。英語の感嘆文にはいくつかの形式があるが、その中でネイティブスピーカーが最も自然であると感じるのはhowやwhatを用いたWH感嘆文ではなく、否定疑

問形式の感嘆文である。本稿はこの事実をBrown and Levinson (1987) のフェイス (Face) という概念で説明する。

第4節では、CHILDESという言語習得のデータベースを用いたWH感嘆文の習得に関する研究調査を報告する。子どもはかなり早い時期に「ある状態や様態が過度である、極限值にある」という意味を知っており、その表現法も知っていると考えられると指摘する。最後の第5節では議論をまとめる。

II 英語の感嘆文

McCawley (1998: 554) によると、英語の感嘆文は大別すると3種類ある。

- (1) 倒置感嘆文 (Inverted Exclamative)
 - a. God, was I hungry!
 - b. Have things ever been happening!
- (2) WH感嘆文 (Wh-Exclamative)
 - a. How hungry we were!
 - b. What a hard time we were having!
- (3) So感嘆文 (So-Exclamative)
 - a. I was so hungry!
 - b. We were having such a hard time!

Swan (1995: 193-194) は、この中の(1)の倒置感嘆文に加えて、否定辞notが生じる事例(4)を挙げている。Swan (1995: 194) は(4)のタイプを否定疑問形式 (negative question form) と呼んでいるが、否定辞がない(1)の形式は "Americans and some British speakers may use ordinary (non-negative) question forms in exclamations" として、主としてアメリカ英語で広く用いられていることを示唆している。

- (4) a. Isn't the weather nice!
- b. Hasn't she grown!

感嘆文の意味的な分析としてはMichaelis and Lambrecht (1996: 239) のSemantico-Pragmatic Propertiesが頻繁に参照されているが、これと同様の分析や考察も頻繁に見受けられる¹⁾。

- (5) a. Presupposed open proposition
- b. Scalar extent
- c. Assertion of affective stance: expectation contravention
- d. Identifiability of described referent
- e. Deixis

例えば、Collins (2005) は、感嘆文はその文の命題が真であることを前提にして、形容詞や副詞が

表す状態の程度が著しく、極限值にあるという含意 (implicature) を表すと述べ、(5 a) と (5 b) に対応する指摘をしている。したがって、例えば、段階的な意味を持たない形容詞や副詞などと相性が悪く、叙実述語しか間接感嘆文を取れない。また、Takahahi and Takahashi (2003) は、感嘆文の含意は瞬時的に成される判断 (thetic judgment) であるとして、(5 e) に対応する考察を行っている。

統語的な研究としては、WH疑問文とWH感嘆文の相違点を説明しようとしたPesetsky and Torrego (2001) の研究が広く知られている。両者は統語的に同じ構文と仮定され、Cの素性の組み合わせで違いを説明している。その後、代案などが提案されている (Ono (2008) を参照) が、WH感嘆文はWH感嘆句のA' 移動で派生されるという点では共通している。

III 言語直感調査

三宅 (1985: 38-40) はアメリカ人35名 (男17名、女18名)、カナダ人24名 (男10名、女14名) に対して感嘆表現の調査を行っている。年齢構成は15歳から70代で、職業は学生、会社員、公務員、主婦、教員、定年退職者などである。

調査では以下の英文を示して、自分がふだん実際に使用する文 (型) はどれか、絶対に使用しない文 (型) はどれかを尋ねたという。その結果をまとめたものが表 (11) である²⁾。

- (6) How pretty she is!
- (7) What a pretty girl she is!
- (8) Boy / Wow / Man / My, she is pretty!
- (9) Isn't she pretty!
- (10) She's really pretty, isn't she?
- (11)

文型	ふだん使用する	絶対に使用しない
(6)	4名 (6.8%)	37名 (62.7%)
(7)	16名 (27.1%)	16名 (27.1%)
(8)	16名 (27.1%)	26名 (44.1%)
(9)	37名 (62.7%)	2名 (3.4%)
(10)	30名 (50.8%)	9名 (15.3%)

まず、howを用いたWH感嘆文(6)についてであるが、これは使用される可能性が最も低いという結果が出ている。ふだん使用すると答えた4名全員が50歳以上であるので、ある意味、古めかしい構文であると言えるかもしれない³⁾。

次にwhatを用いたWH感嘆文(7)について考察してみよう。この構文は述部 (VP) を省略した(12)なら使用するという回答者が8名いたことから、全体としては24名 (40.7%) が使用する

ということになる⁴。したがって、how感嘆文とは異なる特性を備えている可能性が伺える。

(12) What a pretty girl!

Wow, Gee, Ohなどの間投詞も感嘆表現の一種であるが、この調査から、(8)のように間投詞と文を組み合わせた表現をあまり使用しないという話者が意外と多く、50代以上と10代の若者は使用しない傾向にあることが判明した。

三宅(1985)の調査で最も高い使用可能性を示しているのが(9)、次に高いのが(10)である。いずれも学校英文法では感嘆表現として教えられていない文形式であり、疑問文の1つの用法として分析することも可能である。三宅(1985:40)はこの種の構文が頻繁に使われる事実から「統語的には断定を避けた形式が好まれる傾向が認められる」と考察している。見方を変えると、例えば感嘆文の代表と考えられている(6)や(7)は統語的には可能な感嘆文の形式であるが、それを避けようとする話者の意識があるというのである。その意識はどのように説明したらよいだろうか。

1つの可能性はBrown and Levinson(1987)が提案したフェイス(Face)という概念であると思われる。人には自分が属する共同体において2つの欲求があると仮定される(東(1997:119-122)を参照)。1つは肯定的フェイス(Positive Face)と呼ばれる「自分の望みが、他の人にとっても望ましいことだと思われたいという欲望」で、所属する共同体の他の構成員から自分をよく思われたい、仲間として受け入れてもらいたいという欲求とも言える。もう1つは否定的フェイス(Negative Face)で、「他の人からじゃまされなくて、自由に行動したいという欲望」で、束縛を受けずに自由に振る舞いたいという欲求とも言える。2つのフェイスは同時に最大限に満たすことはできず、どちらかが優先され、言語表現の選択にも影響する。

例えば、命令の表現法として(13)と(14)が考えられるが、前者は命令によって相手(=聞き手)の否定的フェイスを脅かす効果(Face Threatening Act, FTA)が生じてしまう。したがって、相手に断るという可能性を与える疑問文の形式を持つ(14)で命令を表現する方がポライト(polite)であるとされる。

(13) Come here next Monday.

(14) Could you come here next Monday?

Huddleston and Pullum(2005:159-160)は節の種類(clause type)と発話行為(speech acts)を区別すべきであると主張しているが、彼らの主張をもとにして(13)と(14)の違いを検討してみよう。(13)は形式的には命令文(imperative)という節の種類であり、かつ、指図(directive)を与えるという発話行為を表している。一方、(14)は閉じた疑問文(closed interrogative)という形式を持つが、指図を与えるという発話行為を表している。書き言葉では、(14)の最後の疑問符は無く、ピリオドになっている事例も見受けられる。質問をするという発話行為を表していないからであると考えられる。

上記のことから、ポライトである表現法を作り出す方法の一つとして、発話行為に対応していない節の種類を意図的に使うという方策があると考えられる。

ここで再びHuddleston and Pullum(2005)の提案を援用して、(6)-(7)と(9)-(10)の違いを考えてみよう。(6)や(7)のようなWH感嘆文という節の種類を使うと、驚きの感情を述べるという発話行為を直接表すことになる。その結果として、聞き手に話者の感情を押しつけてしまい、聞き手の否定的フェイスが脅かされる可能性や、聞き手と話者の感情に差がある場合には、肯定的フェイスが脅かされる可能性が生じてしまう。それらの可能性を低くするために、発話行為に直接対応する文形式(6)や(7)ではなく、疑問文などの別の文形式が選択されるのである。これは、(13)や(14)で考察したように、ポライトである表現法を作り出すために、発話行為に対応しない節の種類を意図的に使うことと同じである。

しかし、そもそも(4)のような否定疑問文は聞き手に対して肯定の答えを期待して発する疑問文である。すると、その点においては上記で指摘したフェイスを脅かす効果が生じてしまう可能性が依然としてあると思われるかもしれない。ただ、この場合も命令文の事例と同様に、節の種類と発話行為の違いで説明できる。つまり、(4)は形式的には否定疑問文であるが、驚きの感情を述べるという発話行為を表している。感嘆文は話者の感情を表出した言語形式であり、聞き手からの答えを期待して発せられているのではない⁵。よって肯定の答えを強いることはないのである。もちろん、その表出の度合いには差があり、既に指摘したように、(6)や(7)のWH感嘆文は(9)や(10)に比べてより直接的ということになる。

IV 感嘆文の習得

1 習得の順序

Terunuma(1997)は言語習得のデータベースCHILDES(MacWhinney(2000))を調査し、WH感嘆文の習得について考察をしている⁶。(15)は、5人の子どもが生後何年何ヶ月何日目にhow感嘆文とhow疑問文を初めて発話しているか、また、what感嘆文とwhat疑問文をいつ発話しているかということを示している。

(15)	Adam	Eve	Sarah	Abe	Naomi
how-Q	2:6.17		3:1.24	2:10.20	1:11.6
how-type E	3:8.0				4:7.29
what-Q	2:9.18	1:12	2:9.6	2:5.0	2:0.3
what-type E	3:0.25		3:4.1	3:3.11	4:9.3

これらの事実から、Terunuma(1997)はhow感嘆文とwhat感嘆文の習得は、それに対応するhow疑問文とwhat疑問文の習得の後に行為されると指摘し、その理由は、how感嘆文とwhat感嘆文の意味構造がhow疑問文とwhat疑問文の意味より複雑であるためであると提案している。具体的には、次のような意味分析を提案している(Terunuma(1997:197))。

(16) How much he's grown!

(17) a. to what extent x, he's grown x much

b. x = extremely high extent

(17) はhow感嘆文(16)の意味を表している。(17 a) は疑問文How much has he grown?の解釈に対応し、それに変更xの値が極度に高いことを示す(17 b) が加わることでhow感嘆文の意味が得られることになる。

しかし、上記の習得の順序については他に理由を求めることも可能である。例えば、howやwhatで問う疑問を表す形式としては、how疑問文とwhat疑問文しか選択肢がない。同じ意味をin what wayなどの別の表現形式を用いることが可能ではあるが、より複雑な構造となる。

一方、既に(1)から(4)で概観したように、感嘆文にはhow感嘆文とwhat感嘆文だけでなく、他にも表現形式がある。例えば、(2 a)と(3 a)、(2 b)と(3 b)の対応関係からわかるように、how感嘆文とwhat感嘆文にはsoやsuchを用いた形式がある。これらは移動操作が関与しないために容易に習得が可能であると考えられる。つまり、感嘆文としては選択肢が複数あり、そのためにより複雑なhow感嘆文とwhat感嘆文の習得が遅れるとも考えられる。

さらに、興味深い事例(18)を考察してみよう。(18)はAdamが3歳8ヶ月で初めて発話したhow感嘆文である。

(18) Mommy (.) she said (.) how I must (.) be so hungry (Adam (3;8.0))

注目すべき点はhowだけを移動させて形容詞を元位置に残し、さらに、howの痕跡の箇所にもsoが生起していることである。

この事実は、Terunuma (1997) が示唆しているように、感嘆文に生じるhowは、疑問詞howのように文頭へ移動する性質((17 a)を参照)と、soが表す強調の意味((17 b)を参照)を兼ねそろえているという仮説で説明できる。(18)の事例は、文頭へ移動するというhowの性質だけが満たされ、強調という意味は元位置で解釈されているのである⁷。この事実から、how感嘆文の前にsoの習得が行われているのではないかという予測が導かれる。これを次節で検証する。

2 HowとSo

既に指摘したように、(2 a)と(3 b)の対応関係から、how感嘆文にはsoを用いた対応形式がある。Terunuma (1997) が考察したBrown (1973) のAdam、それにBloom (1973) が考察したPeterの発話記録をCHILDESで調査した結果、興味深い事実が判明した。

まず、Adamが初めて強調のsoを発話したのは2歳3ヶ月18日目である。(15)との比較からわかるように、これは疑問詞howを初めて発話した2歳6ヶ月17日目よりも早い⁸。

(19) so sorry tow truck. (Adam (2;3.18))

Peterについてであるが、(20)のように疑問詞howは2歳10日目に初めて発話している。また、(21)のようなhow感嘆文は2歳6ヶ月16日目である。これらの事実は、疑問のhowの習得が感嘆の

howの習得より先であるというTerunuma (1997) の考察と一致している。

(20) hey Jenny (.) xxx (.) how ya doin (g) (.) xxx. (Peter (2;0.10))

(21) how you siren! (Peter (2;6.16))

しかし、soの習得に関してはAdamの場合と異なる。初めての発話は2歳8ヶ月12日目となり、how感嘆文の2歳6ヶ月16日目より後になっている。

(22) it's so big. (Peter (2;8.12))

さらに興味ある事例(22)がある。同時期(2歳8ヶ月12日目)に、(23)のように大人(調査者LOI)が強調のsoを使った後に、Peterは同じ使用法で発話しているのである。

(23) so soon? (LOI (2;8.12))

同様の観点からAdamの発話記録を調べてみると、彼は2歳3ヶ月18日目に母親が(24)で強調のsoを使う前に、(19)を使用していることがわかった。

(24) careful (.) don't be so rough. (Adam (2;3.18))

上記の事実から次の仮説が得られる。まず、子どもは「ある状態や様態が過度である、極限值にある」という意味を早い時期に理解しており、それを言語表現で明示できるということを知っている。その明示の方法として、①ある単語(この場合はso)を別の単語(形容詞や副詞)に併合して「ある状態や様態が過度である、極限值にある」ことを示すことができること、また、②ある単語(この場合はhow)を本来の位置とは違う、目立つ位置(この場合は文頭)に移動させて「ある状態や様態が過度である、極限值にある」ことを示すことができることを知っているのである⁹。

3 2種類のWH感嘆文

(15)のAdamとNaomiが初めてhow感嘆文とwhat感嘆文を使った時期を比較してみよう。Naomiの場合は1ヶ月の差があるが、ほぼ同時期に節構造を使ってhow感嘆文を発話し、名詞句構造を使ってwhat感嘆文を使い始めている。節構造と名詞句の構造が並行的であるという最近の統語研究の仮説からすると、これは自然のことであるように思える。しかし、Adamの場合は7ヶ月のずれがある。また、(15)からわかるように、SarahとAbeはwhat感嘆文を習得していても、how感嘆文を発話していない。

興味深いことにMarinis (2004) は現代ギリシャ語では、節構造の左周辺部の習得と、名詞句構造の左周辺部の習得では時期に差があり、2つは独立して習得が行われるという可能性を示唆している。つまり、英語のhow感嘆文とwhat感嘆文の習得においても、大人の文法では節構造と名詞句構造が平行的であるとしても、WH句が生じる節構造の左周辺部と名詞句構造の左周辺部の習得は独立して行われるという可能性がある。これはMarinis (2004) の仮説を支持すると思われる。

V おわりに

本稿の議論をまとめて、今後の課題を提示したい。まず、第2節では、主として意味や語用論的見地から英語の感嘆文について概観した。第3節では、三宅(1985)のネイティブスピーカーの言語直感の調査を紹介した。(1)から(4)のように、英語の感嘆文にはいくつかの形式があるが、その中でネイティブスピーカーが最も自然であると感じるのはhowやwhatを用いたWH感嘆文ではなく、否定疑問形式の感嘆文である。その理由をBrown and Levinson(1987)のフェイス(Face)という概念で説明できると提案した。第4節では、CHILDESという言語習得のデータベースを用いたWH感嘆文の習得に関する研究調査を報告した。子どもはかなり早い時期に「ある状態や様態が過度である、極限值にある」という意味を知っていると考えられると指摘した。

今後の課題として、次の2点が挙げられる。まず、部分的に注4でも触れたが、(2)のようなWH感嘆文と、(4)のような否定疑問形式との用法の違いを解明することである。次に、より広範囲の言語習得のデータを調査することである。感嘆文についての研究は他の構文よりも遅れているので、本稿はこれらの研究・分析のきっかけとならうとしたい。

注

¹ 村田(2007)はコーパス調査によりMichaelis and Lambrecht(1996)の不備を指摘している。

² 表は各文型に対する59名の話者の回答数の全体数に対する割合を表している。

³ 学校英文法では必ず教えられる構文であるが、この結果から、取り立てて教えられるべき重要構文ではないと言えるかもしれない。この点は既に河上道生氏が『続・英語語法大辞典』(1976年出版)で「中学や高校で多大の時間をかけて感嘆文の練習をやらせる旧来の英語教育はもっと現実的になる必要があります」(p.728)と指摘しておられる。

⁴ BNC(British National Corpus)を利用した調査で、Takahashi and Takahashi(2003)は、what感嘆文の52.6%に述部が無いと報告している。

⁵ (4)のような感嘆文は、場合によっては話者が自分の感情を聞き手に伝えようとしているのではなく、確認するために発しているとも考えられる。この仮説の妥当性は今後の研究課題の1つである。

⁶ Adam, Eve, SarahはBrown(1973)、AbeはKuczaj(1976)、NaomiはSachs(1983)の発話記録による。MacWhinney(2000)を参照のこと。

⁷ これと似た疑問文の事例を子どもが発話することをCrain and Thornton(1998:40)は紹介している。whose-Nが文頭へ移動すべきであるが、whoのみが移動して、属格の'sとNの部分が元位置に残ってる。

(i) Who do you think's elephant jumped the best?

(Adult: Whose elephant do you think jumped the best?)

⁸ この事例については、sorryの語頭の音を言いかけた音がsoとして記録されてしまったという可能性もあるかもしれない。

⁹ what感嘆文とsuchの関係については割愛した。なお習得に関する考察の一部は日本英語学会第27大会で発表したことと重複している。

参考文献

- Bloom, L. (1973) *One word at a time: The use of single-word utterances before syntax*, Mouton, The Hague.
- Brown, R. (1973) *A First Language: The Early Stages*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) *Politeness- Some universals in language usage*, Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Collins, P. (2005) "Exclamative Clauses: a Corpus-based Account," *Proceedings of the 2004 Conference of the Australian Linguistic Society* (<http://hdl.handle.net/2123/101>).
- Crain, S. and R. Thornton (1998) *Investigations in Universal Grammar: A Guide to Experiments on the Acquisition of Syntax and Semantics*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- 河上道生(1976)「23. How ... ! とWhat ... !」渡辺登士・編著者代表『続・英語語法大事典』pp.727-728, 大修館書店, 東京.
- Kuczaj, S. (1976) "Arguments against Hurford's Aux Copying Rule," *Journal of Child Language* 3, 423-427.
- MacWhinney, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*, 3rd edition, Volume 2, *The Database*, Mahwah, LEA, NJ.
- Marinis, T. (2004) "Acquiring the Left Periphery of the Modern Greek DP," *Peripheries*, pp. 359-382, Springer, The Netherlands.
- McCawley, J. D. (1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd edition, The University of Chicago Press, Chicago.
- Michaelis, L. A. and K. Lambrecht (1996) "The Exclamative Sentence Type in English," *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 375-389, CSLI Publishers, Stanford, CA.
- 三宅 亨(1985)「現代英語における感嘆表現」『桃山学院大学人文科学研究』21(2), pp. 23-43,

桃山学院大学.

村田勇三郎 (2005) 『現代英語の語彙的・構文的事象』 開拓社, 東京.

Ono, H. (2008) "Licensing Exclamatives and Intervention Effects," *JELS* 25, 207-214.

Pesetsky, D. and E. Torrego (2001) "T-to-C Movement: Causes and Consequences," *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, Cambridge, MA.

Sachs, J. (1983) "Talking about Here and Then : The Emergence of Displaced Reference in Parent-child Discourse," *Children's Language*, Volume 4, ed. by Keith Nelson, pp. 1-28, Lawrence Erlbaum Press, Hillsdale, NJ.

Swan, M. (1995) *Practical English Usage* (New Edition), Oxford University Press, Oxford.

Takahahi, M. and H. Takahashi (2003) "The English Exclamative and Its Subtypes," *Empirical and Theoretical Investigations into Language*, pp. 691-705, Kaitakusha.

Terunuma, A. (1997) "The Acquisition of WH-exclamatives," *Proceedings of TACL 1997*, pp. 191-202.